
I S 転生の翼

御坂弟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生の翼

【Nコード】

N8657X

【作者名】

御坂弟

【あらすじ】

神の手違いで死んだ俺は神から転生させてもらえる事になった。

文章力が無いですが宜しくお願いします。

プロローグ（前書き）

あまり小説を書いた経験が無いのでへたくそですが宜しく願います。

プロローグ

とある日の夕方

「ふう、やっと新作のプラモが買えたぜ。」

「さっさと帰って作り始めるか。」

俺は最近出た新作のプラモが買えて調子にのっていた

そんな俺の視界に横断歩道の上で座っている猫が入った
そしてそのすぐ近くまで車が迫っていた

「なっ！アブねえ！」

俺はとっさに猫に走りより、横断歩道の向こうまで投げ飛ばした

ドンっ！

猫を投げ飛ばした俺は猫の代わりに車にはねられた、
そして徐々に視界が薄れて行く中、思った

『せめて、これを作りたかったな。』

そして俺の視界は真っ暗になった

プロローグ（後書き）

ぜひ次も宜しくお願いします。

神様（前書き）

連続投稿です。

神様

俺は目が覚めると一面真っ白な部屋だった

「なんだここ、心理の扉でもありそうだな。」

『そんなものは無いよ』

「うわあっ！何時からいたんだよ。」

俺の後ろにいかにも神ですみたいな人がいた

『みたいなじゃ無くて本物だよ。』

「ええっと、俺死にましたよね？」

『ええ、あなたは猫をかばって死にました、しかしその猫が私の親友のペットだったのです。』

それで彼がキミを転生させてほしいと言ってまして、あなたが行きたい世界に転生させることになったのです。』

「マジですか？」

『マジです。』

「どいでもいいの？」

『はい、どいでも良いです。』

「じゃあ、ISの世界が良いです。」

『ええつと、体などはどうします?』

「じゃあ、体はhackのハセヲで身体能力は最高まで、ISは俺の知ってるガンダムの機体で。」

『わかりました、それではあなたを原作開始の少し前に落とします。』

「え?落とす?」

『はい、落とします』

神様がそういうと俺の下の地面に穴が開いた

「そういうことかぁーーーー!!」

案の定俺は暗闇に落下した

神様（後書き）

次回は早めに更新します。

主人公設定（前書き）

今回は主人公設定です。

主人公設定

名前 神杉来斗

見た目 hackのハセヲ似

年齢 17歳

好きなもの プラモ、本、甘いもの

嫌いなもの 他人を見下す人間、コーヒー

使用機体 ヴァリアス

主人公説明

他人を見下す人間が嫌いで基本的にそれ以外の人には優しい。
神に転生させられた後、篠ノ之束の隠れ家の近くに落下、突然現れたのと
束の作っていないコアを持ったISを持っているということに気が
入られる。
その後束の頼みでIS学園に行くことになる

機体説明

ヴァリアス

来斗の記憶にある、ガンダムに出てきた機体がベースで出来る
その場の状況によって好きな機体を選べる
しかし、強すぎる武器にはリミッターがかけられ、機体にも
リミッターをかけている。

篠ノ之 束（前書き）

全然束のキャラがわからない。
かなり束のキャラが違うかもしれないませんがご了承ください。

篠ノ之 東

暗闇の中で一人の女性がキーボードを動かしていた

『ん、なんだろ、この反応は、ISのコア
にしては少し違うな、しかも突然現れたし。』

女性はウサミミをつけていて、目の下にはクマが出来ていた。

『すぐ近くだし、少しだけみてみようか。』

女性はそういつと暗闇から出て行った

来斗は今気絶している、神に落とされた後、比較的低い所から出てきたのだが、
打ち所が悪く、気絶してしまったのだ

『おおーい、きみ、起きなよ。』

「う、ううん？あんな誰？」

『そういう時はそっちから名乗るものだと思うけど。』

「ああ、すいません、俺は神杉来斗です。」

『じゃあ、らーくんだね、私は天才の篠ノ之束さんだよー。』

(らーくんってなんだよ、ていうかいきなり束さんに遭うってどうよ。)

束「そういえば、らーくんのそれ、IS?」

束の視線の先は俺の人差し指の指輪

「たぶんそうだと思います。」

束「たぶんって言うのも気になるけど、もしかしてらーくん動かせるの?」

「はい、操縦はよくわかりませんが。」

束「誰が作ったの?」

(ああ、どうしよう、神が創りましたなんていえないし。)

『来斗さん、来斗さん。』

(あれ? 神様?)

『はい、いまあなたの状況を見ていましたが、今の貴方の体は全てがオーバースペックですが

それは知能の良さも例外じゃありません、今の貴方は篠ノ之束と同じくらい良いので

ISくらいなら作れるので、自分で作ったと言ってください。』

(ああ、わかった。)

「自分で作りました、前にちよつと実物を見たら意外に作れそうだったから作りました。」

束「ええ〜！？ほんとに？らーくんもすごい天才だねえ。」

「そうでもないです、所で、しばらくの間泊めてくれませんか？家が無くて。」

束「だったらIS学園に行ったら？あそこなら男性のIS操縦者だって言えば入れるよ
それまでの間はここにいて良いけど。」

「じゃあ、そこに行って見ます。後少しコイツを弄りたいんですけど。」

人差し指のヴァリアスを指差す

束「じゃあ、この束さんの研究所を使うと良いよ。
天才の研究所だからね、ほとんどの物が作れるよ。」

「ありがとうございます。じゃあよろしく願いします。」

束「じゃあ、研究所に行こうか。」

「あれ、でも見当たらないですよ？」

束「この束さんが普通の所に作るわけじゃないか。ポチツとな」

束がスイッチを押すと地面がスライドして階段が現れた

束「じゃあいこうか。」

「はい。」

そういえば機体は何を使おうか。

原作開始まで二ヶ月程度あるしじっくり考えるか。

篠ノ之 東（後書き）

ほんとにセシリア戦辺りどの機体を使いましょうか。

福音辺りの機体は考え付くんですがね。

IS学園(前書き)

遅くなってすいません、バカテスのほうも明日、明後日には投稿します。

IS学園

俺はあの後研究所でヴァリアスを調べてみたけど

本当にガンダムに出てくる機体になれる様になっていた

後はほかの機体の武装も使える様になっていた位かな

それと操縦の練習もしてみたら、何故かすぐ理解できてかなり上達した。

たぶん、神様が気を利かせてくれたんだろう、

後サポート用に八口を作ってみたら、東さんが気に入って欲しいと
いうので

ミニサイズの八口を作ってあげた。

そのお礼と言って、バイクを作って貰った

そしてすぐに二ヶ月が過ぎ学園に行く日が来た

「それじゃあ、ありがとうございました。」

東「うん、何か用があったら電話してね。」

うん、やっぱり原作みたいに興味を持った人には優しいみたいだ。

俺は東さん特製のバイクを使いIS学園に向かった

IS学園

そして俺はIS学園に着いた

聞いた話だと迎えの教師がいるらしいけど。

？「すまない、少し遅れてしまった。」

「いえ、今来たばかりです。」

千「そうか、私がお前のいくクラスの担任の織斑千冬だ。」

おお、やっぱりすごいオーラが出てる

「神杉来斗です。」

千「すぐに入学式が始まる、移動するぞ。」

「はい。」

暇な入学式は寝て過ごし、今は自己紹介のじかんだ

山「それじゃあ、出席番号順に自己紹介をしてください。」

この人が山田先生か、やっぱり小動物系だな、背は小さいのに胸だけはでかい

そして順番に自己紹介している中、寝ている奴が一人、

あれが一夏か、山田先生が起こしてるのに中々起きない。

おっ立ち上がった、

一「えー・・・、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

えっと・・・終わりじゃないよな。

一「以上です。」

おいおい、マジかよ、何人かずつこけてたぞ

すると千冬さんが教室に入ってきて、一夏の頭を出席簿で殴った。

『スパアン』

あれ出席簿の音じゃねえぞ、下手したら死ぬ

一「げえっ、関羽!？」

いやいや、もう人間ですらない、サーヴァントじゃねえの？
だとしたらセイバーかな。

『ガッ』

「危ないじゃないですか。」

千「チツ、余計な事を考えるからだ。」

今の音は出席簿をナイフで防いだ音だ

ていつか今舌打ちしたよな!?

それに何で分かったんだ？

山「織斑先生、会議は終わってたんですか？」

千「ああ、クラスの挨拶を押し付けて悪かったな。」

山「いえ、副担任ですしこれ位しませんと。」

どうやら織斑先生が自己紹介をするみたいだ、

千「諸君、私の役目は君たち新人を一年で使い物になるまで育てる
事だ。」

私の言うことはしっかり聞き、理解しろ。逆らってもいいが、言う
事は聞け、いいな

ん？なんか嫌な予感

その瞬間

『キヤーーーーーー!!』

黄色い声援が響いた。

う、うるさっ、

くそ、忘れてた

まだ何か行つてやがる。

千「以上でSHRは終わりだ、諸君らには半月で基礎知識を覚えて貰う。」

その後基本動作を半月で覚える。いいか、いいなら返事をしろ、良なくても返事をしろ、いいな!」

『は、はい!』

ふう、やっと終わった、

一夏と話して見るかと思い、一夏の席に向かおうとしたら、ポニーテールの少女

篠ノ之箒につれていかれてしまった

はあ、しょうがない次の時間にするか

そして二時間目

「ほとんど全部分かりません」

一夏がぼけていた、だっておかしいだろ、
何で電話帳と間違えるんだよ。

とそんな事がありながら二時間目が終わった。

そして一夏が話しかけてきた

「よう、俺は織斑一夏、同じ男同士仲良くやろつぜ。」

「ああ、俺は神杉来斗、来斗って呼んでくれ。」

「ああ、宜しくな、来斗。」

？「ちょっとよろしくって？」

「ん？」

「ああ？」

？「まあ、なんですの、そのお返事。このわたくしに話しかけられるだけでも光栄なのでから
それ相応の態度というものがあるではないかしら？」

「……………」

うん、こつこつというのは相変わらず苦手だ、一夏も同じなようだ

「悪いな、俺君が誰か知らないし。」

セ「私を知らない？イギリス代表候補生にして入試主席のセシリア・オルコットを？」

一「質問いいか？」

セ「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

一「代表候補生ってなに？」

『『がたたっ』』

おいおい、また何人がずっこけたぞ。

「おい、マジで知らないのか？」

一「おう、知らん。」

セ「信じられませんかわ、極東の島国と言うのは、ここまで未開の地なのかしら。常識ですわよ。」

「一夏、代表候補生って言うのは国家代表IS操縦者の候補生ってことだ。」

一「確かにそんな感じの名前だな。」

セ「そう、エリートなのですわ！」

セ「本来ならわたくしのような人間とクラスを同じくするだけでも

幸運なのよ。おわかり？」

「「そうか。それはラッキーだ。」」

セ「・・・バカにしていますの？」

セ「大体、貴方たちISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。」

一「俺に何か機体されても困るんだが。」

「お前の方がバカだろ、俺よりISに詳しいのなんて東さんくらいだぜ。」

セ「なにを言ってますの、そんな訳ありませんわ。」

「まあ、信じるも信じないもお前しただ。」

キーンコーンカーンコーン

セ「また後できますわ、逃げないことね！よくって!?!」

また来るのかよ、めんどくさい

千「さて、この時間はまず再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。」

うわ、めんどくさいな。

『はいはい、織斑君を推薦します。』

「えっ、おれ!？」

ドンマイー夏

『じゃあ、私は来斗君を推薦します。』

千「では候補者は織斑と神杉でいいか？」

「ちよ、ちよっと待った俺はそんなのやら……」

千「自薦他薦は問わない。」

「い、いやでも。」

あきらめろ、決定事項だ

セ「待ってください！納得がいきませんわ！」

きたよ、うざいのが

セ「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

マジでうざっ！

セ「実力でいけばわたくしが代表になるのは必然。それを、物珍しからという理由で

極東の猿にされてはこまります！」

俺が猿ならあんたは何だよ？

あんまり調子に乗るなよカス

セ「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと
自体、

わたくしにとっては耐え難い苦痛で……」

ブチっ

「いい加減にしろよ、カスが！黙って聞いてりゃいい気になりやが
つて！」

大体その後進的な国で開発されたISの代表候補生になったからっ
て、

威張ってたのはどこのカスだ！」

ー「イギリスだって大してお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で
何年覇者だよ。」

セ「なっ！？貴方たち、わたくしと祖国を侮辱しますの！？」

「あんたの態度を見てると格下には侮辱してもいいって言ってるよ
うなもんだぜ？」

セ「わたくしがあなたより劣っていると申しますの！？」

「ああ、そうだね。俺より優れていると言いたいならISの「コマぐ
らい作れるようになれよ。」

『無理だよ、神杉君、ISのコアは篠ノ之博士意外に作れないんだから。』

「俺は作れるぜ、しかも篠ノ之束のお墨付きだ。」

セ「っ！決闘ですわ！」

「別にいいぜハンデはどのくらいつける？」

セ「あら、早速お願いかしら。」

「いや、俺がハンデをつけるんだよ。」

そついうと、クラスで爆笑が巻き起こった

『本気で言ってるの？神杉君？』

『男が女より強かったのって大昔の話だよ？』

「でもそれはISが使えたからだろ。俺らはISを使えるからここにいるんだぜ？」

『でも相手は代表候補生だよ？』

「代表候補生は一部を除き、その国の人しかねないから、国のレベルが低ければ代表候補生だって弱い。」

「大体俺は篠ノ之束に並ぶ天才だぜ？そんなカスに負ける訳が無い。」

千「さて、話はまとまったな。それでは一週間後の月曜に勝負を行う。」

織斑と神杉とオルコットは用意をしておけ。」

さて、どうあそんでやるか

その後、とある教室

？「過去の経歴が不明、ノーナンバーのコアの機体を使う男ねえ。さらにコアを作れるとは。」

しかもいきなり代表候補生に勝負を挑むなんて。

ふふ、面白い人ね。」

IS学園（後書き）

とりあえずセシリア戦の機体は決まりました。
何なのかは次回あたりに。

同居人？（前書き）

すみません、結構読みづらいかもしれません

同居人？

放課後、俺は一夏とともに机にうな垂れていた

「痛い、胃が痛い。」

一夏は違うことでうな垂れているようだが、俺はあの金髪ドリルの
ストレスで

胃がとても痛くなっていた

しかも、今は他のクラスからも女子が来て（俺達意外女子だが）
小声でこそこそ話している

俺はこういうのが嫌いだ、聞いているとイライラするのだ、
それによりさらに胃が痛くなりかなりやばい。

山「ああ、二人ともまだ教室にいたんですね、良かった。」

「なんすか？」

俺が顔を上げると同時に一夏も顔を上げた

山「えっと、お二人の部屋が決まりました。」

一「あれ、俺らの部屋って決まっていなかったんですか？
聞いた話だと一週間は自宅から通学だって。」

俺はホテルだが。

山「そうなんです、事情が事情なので無理やり部屋割りを変えた
そうです。」

一「まあ、分かりましたけど荷物はどうするんですか？」

あれ？ダースベイダーの曲が聞こえる

千「私が用意しておいた。」

「あれ？俺のプラモは？」

千「無理やりバッグに詰め込んだ、変な音がしたが大丈夫だろう。」

「ううー。」

くそ、この人相手じゃ文句が言えない、
俺のガンプラが、

山「じゃあ、時間を見て部屋に行ってください。」

その後夕飯の時間や大浴場についてなどを聞き、今は部屋に向かっ
ている

そして

「……いつまで着いてくるんですか？」

部屋の前でストーカーさんに話しかける

？「あら、気付かれちゃった。」

「何の用ですか？生徒会長さん。」

？「・・・なんで知ってるのかしら。」

「まあ、いろいろあって貴女の情報を見たんですよ、更織楯無さん。まあ、詳しくは分かりませんでしたけど。」

半分嘘だ、この人の事は前から知っていた、原作でも出てたしね、でも本当に詳しいことが分からなくなっている

楯「そう、よく考えるとあなたならできそうね。」

「まあ、別に誰かに言うわけじゃありませんから安心してください」

楯「そう、分かったわ。」

「所でなんでストーキングなんてしたんですか。」

楯「少し興味があつたからね、男のIS操縦者で篠ノ之束と同じくらしい天才

普通は気になるでしょう。」

「そうですか、じゃあ、部屋に入るんで。」

楯「ええ、それじゃ、またあとで。」

そして俺は部屋に入り、数分すると、誰かが入ってきた

きつと同室の人だろう

楯「ハロー」

「何でいるんですか？更織さん。」

楯「だってここ私の部屋だもの。」

「really?（本当ですか？）」「」

楯「何で英語？ええ、まあ本当よ、面白そうだから一緒の部屋にしちゃった。」

「そんな、てへ、みたいな感じで言われても」

楯「まあ、いいじゃない、それをお願いもあるし。」

「却下です」

楯「何にも言っていないじゃない。」

「絶対面倒なことですから。」

楯「残念ながら拒否権はないわ、内容だけどあなたには生徒会副会長になってもらうわ。」

「はあ、仕方が無いですね、まあ、いいですけど。」

楯「ありがとー」

突然楯無さんが抱きついてきた

「ちょっと、あんまり抱きつかないでください」

楯「別にいいじゃない、減るものじゃないし。」

「俺じゃなかったら、襲ってるかも知れませんよ。」

楯「あら、別にいいのよ襲っても。」

「やめてください、本気にしたらどうするんですか。」

楯「うーん、責任を取ってもらおうかな」

「はあ、ほんとに疲れる。」

ため息をつきながら様子を見る。

楯「にこ」

うん、すごいかわいい、じゃなくてなんて人たらしなんだろう

「もう疲れたんで寝ます。」

楯「じゃあ、そっちのベッドを使ってね」

「はい」

そして俺は眠りについた

同居人？（後書き）

この続きをどうしよう

クラス代表決定戦 その1 (前書き)

今回はセシリア戦のパート1です。

クラス代表決定戦 その1

朝、俺はいつもと同じくらいの時間に起きた
しかし、違和感がある、何故か動けないのだ、
何事かと布団を捲ると、静かに寝息を立てている楯無さんが抱きつ
いていた

「あれ、なんで居るんだ？」

楯「うん、おはよう。」

楯無さんも起きたようだ

「ちょっと楯無さん、なんで居るんですか。」

楯「だって、ここ私のベッドだもの。」

「俺言われた場所に寝ましたよね？」

楯「ええ、でもあなたのベッドとは言っていないわ。」

「じゃあ、あつちに寝ます、つてあれ!？」

そこには昨日はあったはずのベッドが無くなっていた

楯「会長権限で撤去しちゃった。」

「マジですか?」

楯「ええ、本気と書いてマジと読むわ。」

「はあー」

昨日一日過ごしただけで分かった事がある、
この人に逆らうだけ無駄だと言う事だ

楯「そんな事より朝食を食べに行きましょう？」

「別に良いですけど、早く着替えてくださいよ。」

今の楯無の服装はYシャツに下着、
はつきり言って目のやり場に困る

楯「気になるの？」

そういつて、俺の腕にしがみ付いて来る、
腕に柔らかい感触が、

「ちょ、くつついてますって。」

楯「ふふふ、えっちなあ。」

「楯無さんがやったんでしょうが」

楯「まあまあ、時間なくなるわよ？」

「はいはい、じゃあ入って来ないで下さいよ。」

そういつて洗面所に入り着替え始める

そして着替え終えるて洗面所から出ると既に着替えた楯無さんが居た

楯「じゃあ、いきましようか、おねーさんお腹すいちゃったわ。」

「はいはい」

食堂

いま俺は朝食を食べている、普段なら簡単なことなのに俺は多分今までで一番手間取っている。

その理由がやはり

楯「はい、あーん」

楯無さんだ

なぜかさつきからずっと食べさせようとしてくる昨日この人に逆らったら一時間以上くすぐられた、本当にあれはやばかった、腹筋が破壊される所だった

そうなる

「あ、あーん」

食べないと駄目なんだよね

そしてこれが毎日になり

あつという間にクラス代表決定戦当日となった
しかしまだ一夏の機体が届かない

一夏対ドリルの勝者と戦うから、俺もひまなんだよね。

それになんか一夏と箒の間で妙な空気が流れている

一「なあ、箒」

箒「何だ、一夏」

・・・空気が重い

一「気のせいかもしれないが」

箒「そうか。気のせいだろう」

一「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

ああ、そういうことか。

箒「・・・」

もしかして

一「目をそらすなっ」

そういえば一夏の奴毎日剣道場に行ってたな

「……………」

「……………」

うう、耐え切れない

山「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

ナイス、山田先生

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

山「は、はい。す〜は〜、す〜は〜」

「はい、そこで止めて」

山「うっ」

おいおい、本気で止めてるぞ、冗談通じないよな、この人

「……………」

山「……………ぷはあっ！ま、まだですかあ？」

たぶんやめさせるタイミングを見失っただけだと思います

千「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パァンッ！

相変わらずすごい音だ

ー「千冬姉」

ああ、バカだな、そんな事言ったら

パアンツ！

もう一発来るに決まってるだろ

千「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなければ死ぬ。」

そりゃあ教師の台詞じゃないですよ

山「そ、そ、それですわねっ！きました！織斑くんのIS」

やっときたか、待ちくたびれたぜ

それなのに

あれだけ待たせたのに

.....勝者、セシリア・オルコット

何で負けてんだよ、このバカ野郎！

まあいい、次は俺の番だ！

クラス代表決定戦 その1（後書き）

ぜひ感想お願いします

クラス代表決定戦 その2 (前書き)

今回でクラス代表決定戦は終了です。

クラス代表決定戦 その2

「ヴァリアス、タイプセレクト デスサイズヘルカスタム」

そう言うと体にデスサイズヘルカスタムの装甲が展開される

「さあ、わがままお姫様にお仕置きをしようか」

そしてピットからアリーナに降りる

「さあ、はじめようぜ」

セ「……………」

あれ？返事が無い

「おい、ドリル頭」

セ「はっ！？すみません、少し考え事をしてました」

ああ、そういえば一夏にフラグが立つんだっけ

別にドリルは好きじゃないから別にいいけど

「さっさと始めようぜ」

セ「わかりました、始めましょう」

そしてブザーが鳴った

「いくぜ！」

まず俺は鎌を振り、斬撃を飛ばす

セ「その程度の攻撃！」

セシリアはその攻撃をかわす、しかしその先にはすでに俺がいた

「はあっ！」

そして斬撃を当てる

セ「くっ！まだですわ！」

セシリアは距離をとり、ビットを飛ばしてくる

「そんな攻撃に当たるわけ無いだろ」

俺はビットをかわしながら壊していく、

「さっさと終わらせようぜ」

全てのビットを壊すと俺はハイパージャマーを使う

確かあれにはミサイルが隠されていたはず

姿が見えなければ当てられないからな

セ「どこに行きましたの!?!」

やべ、見てておもしろい

「こっちだよ」

俺はセシリアがこっちを向くと同時に鎌を振り下ろした
どうやらその一撃でシールドエネルギーが尽きたようだ

『試合終了、勝者、神杉来斗』

パンツ！

試合を終えてピットに戻ると織斑先生の出席簿が待っていた

「いったあー！」

千「遊びすぎだばか者、束からの情報だと開始数秒で終わるはずだ」

確かにストライクフリーダムとかクアンタ使えばいけるかも知れない

「でもそれならそれで怒るでしょ？」

千「まあ、そつだな。ほどほどにしると言う事だ」

「了解です」

千「では、今日はゆっくり休め」

クラス代表決定戦 その2 (後書き)

戦闘描写がすごく難しいです

ちなみにヒロインは楯無とシャルの予定です

セシリア戦後 部屋にて（前書き）

すいません、FF零式ばっかやってみました
テストも近いのに……

セシリア戦後 部屋にて

セシリアと戦った後、俺は部屋に戻っていた

「はあ、今日はなんか疲れたな」

ISってまだ慣れてないからな、しょうがないのかもしれない

そう考えているうちに部屋に着いた

「早く寝よ。」

ガチャ

楯「お帰りなさい、ご飯にする？お風呂にする？それとも、わ・た・し？」

パンツ！

幻覚だな、うん、きっとそうだ

いくら同じ部屋だからって、楯無さんが裸エプロンで居るわけがない

でもなんでよりにもよって裸エプロン

そんな特殊な性癖があったのか、俺は

いや、そんな訳がない、たまたまだ、たまたま

では気を取り直して

ガチャ

楯「お帰りなさい、私にする？私にする？それともわ・た・し？」

もう現実逃避はやめよう、これは正真正銘本物の楯無さんだ

楯無さん、止めさせないと毎日この格好で待ってそうだからな、でも言葉で言っても聞きそうにないしな、

だったら、

「それじゃあ、楯無さんを貰いましょう」

そう言っつて俺は楯無さんをベッドに押し倒す

「楯無さんが誘ってきたんですからね」

耳に息を吹きかける

楯「ふああ、あ、あれは冗談で」

ふふ、かわいいな

「楯無さんは俺じゃ嫌？」

楯「そ、それは、その・・・」

楯無さんみたいになっつてからかわれるのに大抵慣れてないんだよねでもかわいそうになっつてきたな

「ははは、楯無さんっつてからかわれるのに慣れてないんですね」

楯「え？どついつこと？」

「ふふ、さっきまでの冗談ですよ」

楯「も、もう！おねえさんをからかっちゃだめよ」

「でも、次あんな格好したら本当に食べちゃいますよ」

これできっと、もうやらないはず

楯「そのときは、責任を取ってもらおうわ。」

あれ？

「えっと、どついつことですか？」

楯「一生を共にしてもらおうわ」

酷くなってるよね！？

「それって要するにけ、」

楯「はいはい、い、夕飯たべにいきましょうー」

むう、遮られてしまった

でも顔が赤かったし、まんざらでもないのかな？

でも、楯無さんも一夏ラバーズに入ってなかったっけ、

まあ、もともと俺が居る時点で原作ブレイクしちゃってますけど

この日から何故か夜に楯無さんと寝るとときどきして寝れなくなった

セシリア戦後 部屋にて（後書き）

シャルロットまで遠いなあー

楯無さんもキヤラあってるかわからんし

書いてみるとかなり難しいですよね

それと、ぜひ感想お願いします

代表決定！（前書き）

すいません、テストが近く、勉強の合間に書く感じなので
11月24位までの間、投稿が遅くなります

代表決定！

翌日、朝のHR

山「では、一年一組代表は織斑一夏さんに決定です。

あ、一繋がりでいい感じですね！」

はは、一夏の奴めっちゃ暗い顔してやがる

一「先生、質問です」

山「はい、織斑くん」

一「俺は昨日の試合に負けたのに、なんでクラス代表になってるんですか？」

山「それは……」

セ「それはわたくしが辞退したからですわ」

一夏に惚れてから態度は変わったけど

いちいち腰に手を当てるポーズやら上から目線な言葉、変わらないな

？「君はなぜ辞退したんだ？」

耳ではなく、頭から聞こえる声

「まあ、一夏には強くなってもらわないと駄目だからな」

？」「そういう事にしておこう」

ちっ、コイツには面倒だからやめたって事が気付かれてやがる

あ、ちなみにコイツのことを説明するには数時間前にさかのぼらなくちゃいけない

数時間前

「ふああ、ふう」

いつもの時間に起きると楯無さんが隣に居た、ただひとつ違うのは前まであったYシャツが無くなり、下着だけで寝ている

まあ、こういうのにはもう慣れたけどね

しかし、それ以外にも違うところがあった、腕時計が腕に付いていた

(あれ？おれ時計なんて持ってなかったよな？)

すると、頭の中に声が響いてきた

神『おひさしぶりです、来斗さん』

『あんだあの時の神か？』

神『ええ、そうですね、今回は用件があつてきました』

『なんだ？用件って？』

神『実は以前に渡し忘れたものがあつたので』

『あの腕時計のことか？』

神『はい、あれにはAIが入ってます、ちなみに投影も出来ますよ』

『なんだよその近未来的な腕時計！？』

神『ちなみにAIは自分で選べますよ』

『種類は？』

神『えっと、テイエリアとかフェルトとかキラとかアスランとかです
すね』

『声って外の聞こえるのか？』

神『それは大丈夫です、声は今みたいに頭に響く感じなんで、
まあ、外部音声も使えますけど』

『じゃあ、用件は終わりか？』

神『後ひとつだけ、あなたがこの世界に来たことでイレギュラーな存在が出現したようでそれを壊して欲しいんです』

『目印とかは？』

神『あなたと同じMSです』

『MSだな、分かった』

神『くれぐれも気をつけてください』

『ああ、分かってるよ』

神『それでは』

つて事があったのだ

前まであった八口は楯無さんにあげた、水色の小型のボディにして何でも仕事の手伝いに使うそうだ
まあ、情報処理能力が高いからね

それじゃあ、戻って

—「じゃあ、来斗でいいじゃないですか」

見苦しいな、一夏

「俺も辞退した」

「何でだよ!？」

「お前なあ、よく考えろ、お前は狙われてるのに今の弱いままだったら何があるかわかんないだろ？」

「まあ、それはそうだな。そこまで考えてるとは、見直したぞ」

「まあ、実際は面倒だったからだけど」

「ちょっと見直した俺が馬鹿だったよ」

ふっ、やっぱりこういうのは楽しい、悪趣味?そんなことはありません

もう少し遊ぼうか

「そうだよ!お前は馬鹿だ!」

「ひどっ!そこまで言うこと無いだろ」

「否定できるのか?」

「うっ、それは」

千「おい、いい加減に話を進めろ、そして織斑が馬鹿なのは昔からだ」

ダースベーター登場

ー「千冬姉まで!?!」

やっぱり馬鹿だ、禁句言いやがった

バシンッ!

千「織斑先生だ」

ー「すみませんでした」

ものすごい勢いで椅子の上で土下座をする一夏

千「クラス代表は織斑一夏、異存は無いな?」

はーいと全員(一夏除く)が返事、

俺は返事をしながら、せめてかまっておげようよと、

一夏を見ると、まだ土下座をしている

ティ『君のせいな気がするんだが』

聞こえない、聞こえないよ、ティエリアの声なんて

そんな感じで朝のHRは終わった

代表決定！（後書き）

友達にこの小説について聞いたら、なんか足りないって言われたのですが、自分ではよく分からないので、アドバイスお願いします

お祝いパーティー（前書き）

遅くなつてすいません
もうすぐテストが終わるので

お祝いパーティー

千「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。
織斑、神杉、オルコット。試しに飛んで見せる」

この人はほんと強引だな、と思いながらもやらないと怒られるので
展開をすることにした

「ヴァリアス タイプセレクト ウイングゼロカスタム」

そういうと一秒もしないうちに装甲が展開される
周囲からは『きれい』や『かつこいい』という声が聞こえる

まあ、ウイングゼロカスタムだからな、翼がすごい綺麗なんだよね

千「おい織斑、早く展開しろ。神杉を見習え、

熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

一夏のやつ、まだ展開してないのか。
まったく、遅いな

その後、一夏は無事に展開、しかし、上昇スピードが遅く、また怒
られていた

しかも下降の時、すごいスピードで俺に落下してきた
まったく、ティエリアが教えてくれなかったらどうなってたか

まあ、後は武装展開の時も遅いって言われてたな、
俺？もちろん大丈夫だったよ？

一夏は授業終了後もグラウンドの穴埋めに時間を使っていた

.....

『というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとうー！』

はい、なぜこんな状況なのか、情報を整理しよう

部屋に戻る 時間を潰す クラスの女子が来る 食堂につれてこられる（今ここー！）

情報整理完了っつと

まあ、面白そうだからいいかな？

『いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がねえ』

『ほんとほんと』

『ラッキーだったよねー。同じクラスになれて』

『ほんとほんと』

おい！そのやつ！お前は二組だろっ！

ていうか、明らかに一クラス以上の人数居るだろ！

まあ、こんな状況の女子に何を言っても無駄だろう
俺もせいぜい楽しもう

そしてひとまず腹の減った俺は飯を食おうと思ったのだが

？「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏さんと神杉来斗くんに特別インタビューをしてみました！」

オー、と皆が言う、なんでオー？

薫「あ、私は二年の薫薫子。よろしくね。新聞部の副部長やってます。

ハイこれ名刺」

何で名刺持ってたんだよ

ていつか滅茶苦茶回数多いな、めんどくさそうだ

薫「ではまず織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ああ、俺もあとから言わなきゃいけないのか、めんどい

ー「えーと……

まあ、なんとというか、がんばります」

薫「えー。もっといいコメントちょうだいよー。

俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

うわッ！ふるッ！

ー「自分、不器用ですから」

こっちもふるッ！

薫「うわ、前時代的！」

貴女もです

薫「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

いやッ！駄目でしょ！

薫「じゃあ、来斗くんコメントお願い」

「ああはい、俺に近づいたら・・・たべちゃうよ」

ばたっ！

あれ？何人が倒れちゃった、どうしたんだろう

薫「い、いいコメントをありがとう」

それじゃあ、専用機持ちの集合写真を撮らせてね」

先輩はさっさと俺達を引っ張って行って、並ばせた

薫「それじゃあ取るよー。35×51÷24は？」

「74、375です」

薫「ご名答！」

パシヤ

あ、あれ？何故か全員はいつてる、なぜ？

あの一瞬に移動したのか！？

その後の部屋で

楯「いやー、来斗君凄いこと言ったねえー」

「何のことですか？」

楯「さっきのパーティーの取材の時よ

俺に近づいたら食べちゃうよだっけ、じゃあ私も食べられちゃうの
ね」

おおよ、て感じで崩れ落ちるふりをする楯無さん

「安心してください、嘘ですから」

楯「あら、それは残念。それじゃあ早く寝ましょう」

「はいはい、わかりましたよ」

ベッドに入ると当たり前の様に楯無さんが抱きついてくる

楯「それじゃあ、お休み」

「おやすみ」

そして俺は眠りに付いた

お祝いパーティー（後書き）

つきも宜しくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8657x/>

IS 転生の翼

2011年11月18日22時21分発行